

多肢選択文法問題の設問形式に関する研究

—— 択一式と複数選択式の解答プロセスに焦点をあてて ——

池 上 真 人

松 山 大 学
言語文化研究 第35巻第1号（抜刷）
2015年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 35 No. 1 September 2015

多肢選択文法問題の設問形式に関する研究

—— 択一式と複数選択式の解答プロセスに焦点をあてて ——

池 上 真 人

1. 研究の背景

英語教育の現場に限らず、多くの場面で多肢選択問題、いわゆるマークシート型問題は使われている。特にテストや入試においてはセンター試験を中心にマークシート型のテストは多く実施されている。本学の入試も現在は一部の例外を除いては、全ての教科でマークシートによって解答する入試問題を用いて実施している。このように広範囲にわたって利用されている多肢選択問題であるが、当然ながら課題がないわけではない。むしろ大きな課題はあるのだが、その利便性の故に用いられ続けているとも言える。その課題の第一が、理解を伴うことなく正答にたどり着ける可能性が低いことである。つまり、なんとなく正解できてしまうのである。単純に考えると4択であれば、問題文すら読まずに解いたとしても、確率的には25%程度は正解することになる。もちろん25%の正解率であれば入試等では問題にならないかもしれないが、全体を通してすべてに当て推量を使うことはなくても、実際には、いくつかの問題である程度の当て推量を用いられる可能性はかなり高いだろう。また、選択肢すべてから当て推量で1つの正答を選ぶのではなく、「消去法」を使って選択肢を絞り込んでから、最後に当て推量を使う事は筆者自身の経験からも頻繁にあると考えられる。つまり、明確に答えがわからなくても正答にたどり着く可能性は決して低くはないのである。

「なんとなく正解する」理由は単に当て推量ができるからだけではない。多

肢選択問題に限らず選択肢が与えられている問題は、後述するが再認ができるかどうかを問うているのであり、通常の会話の場面のように再生する力を問うているのではない¹⁾。一般的には再生は再認よりも難しいとされているが、再認形式だけで中途半端に学習していると、再認はできても再生はできない、という段階に留まってしまう可能性がある。このような段階で留まっている学生は、選択肢があれば解けるが、選択肢がなければ解けない。またなぜその選択肢を選んだかを問うても、明確な理由がない場合も多い。つまり、正確な知識を伴っていないのである。センター入試などのマークシートによる大学入試に合格することやTOEICにおける高得点が英語学習の最終目標となっている場合にはそれでも構わないかもしれないが、英語力という意味では十分ではないことは明らかである。このように、正確な知識のない段階の学生であっても、消去法などのテスト・テクニックなどと組み合わせることで、結果的には正答にたどり着いてしまう可能性は低くないのである。

これらの課題で指摘しているような「明確に答えがわからなくても正解できる」ということは、言い換えると測るべき力を測れていないとも言える。テストを作成する際には「妥当性」「信頼性」「実用性」の3つの側面から検討しなければならないが（「波及効果」を加えて4つの側面と言われることもある）、多肢選択問題は、目的としている理解を正しく測れているかという「妥当性」の部分に課題があると考えられるのである。本来、良い問題とは、ある知識を理解している学習者は正解し、理解していない学習者は不正解になる問題である。つまり、表1が示すマトリックスのAとDに学習者が集まっているのが良い問題と言えるのであるが、多肢選択問題は、Bに一定程度の学習者が集まってしまうことが課題であると言える。

多肢選択問題の課題として第三に挙げられることは、第一、第二とも密接に

1) 簡単に説明すると、再認とはある事柄を知っているかどうかを確認することであり、再生とはその事柄を自力で思い出せるかということである。例えば、「鬱」という漢字は選択肢があれば選べるが、書いてみろと言われても書けないというようなことは私たちの日常でも良く経験することである。

表1 理解と正解のマトリックス

	理解している	理解していない
正 解	A	B
不正解	C	D

関係しているが、効果的な錯乱肢を作成する事が難しい事である。多肢選択問題の選択肢は正答および錯乱肢で構成されている。通常多く用いられている択一式の多肢選択問題の場合、4択または5択

が多いように思われるが、その場合3つないしは4つの錯乱肢が必要である。しかしながら、実際に錯乱肢を作成してみればわかるが、言語のように同じような意味の表現が複数存在するものを多肢選択問題とした場合には、どのような場面や状況を考えても確実に誤りでありながら、受験者が正答と間違える可能性をもつ錯乱肢を作ることは容易ではない。そのため、問題作成者はしばしば完全な当て推量でもない限り誰も選ばないような錯乱肢を作ってしまうのである。Brown (1996: 55) も、言語テストにおいて、4択問題の場合、正答および2つの錯乱肢を作成するのは比較的容易であるが、3つめの効果的な錯乱肢を作るのは非常に難しいという“Brown’s law”を紹介し、効果的な錯乱肢を作成することの困難さを述べている。効果的な錯乱肢の作成が難しいという事は、受験者が選ぶ可能性のある選択肢の幅は問題の見かけよりも狭いことを意味する。つまり、4択であれば、実質的には3択問題と変わらない可能性があるのである。実際、それを実証的に明らかにしている研究もあり、Shizuka et al. (2006) は、3択と4択の多肢選択問題を比較し、3択でも4択でも難易度には大きな差がないことを明らかにしている。

では、一般的に言われるように、このような多くの課題を抱える多肢選択問題を使うことを止めて記述式の問題を採用すれば良いかという、学習においてはともかく、記述式には前述した3つの側面のうち「実用性」や「信頼性」についての問題がある。そのため、テストも含めて全体的に導入することは、それほど簡単ではない。多肢選択問題が大きな課題を抱えていることを知られていながら広範囲に用いられているのは、錯乱肢の検討などで時間がかかった

としても、実施の面で有用性が高いからである。これは「実用性」の点で優位であると言える。具体的に言うと、単位時間当たりに実施できる問題数が多いこと、そして採点が容易であることなどである。単位時間当たりに実施できる問題数が多いということは、様々な観点からの問題を一度に問う事ができ、受験者の様々な知識を測ることができることを意味している。そのため、広い範囲の知識を問う必要のある入試などの試験では用いやすい。また、問題作成は準備の段階であるため、時間を長くかけることは可能であるが、試験などはある程度定まった時間内で実施しなければならない。この点からも多肢選択問題は利点があると言える。また「信頼性」の側面については、誰が採点しても同じ採点になることが挙げられる²⁾つまり、採点の際に主観的判断が必要とならないため、多くのマークシートがそうであるように、機械による採点が可能である。記述問題の場合は、厳密に採点基準を統一したとしても、採点者によって多少の採点の違いが生まれてしまう。機械による採点が可能である事は、短時間での採点が可能で、コストを安く抑えられるということを意味するため、この点は実用性の面から見ても多肢選択問題の利点と言える。では、多肢選択問題の優位性を確保したまま、妥当性の問題を解決するためにはどうすれば良いのだろうか。つまり、表1のマトリックスのBやCの数を減らすためには何が必要なのであろうか。本研究では、その課題を解決する方法の一つとして、広く用いられている正答が一つの択一式の多肢選択問題ではなく、正答が複数ある複数選択式の多肢選択問題に焦点を当てることにした。通常、多肢選択問題に置いて正答が二つ以上あることは避けるべきことであるとされる。択一式であれば正答は一つでなければならないのは自明のことである。しかしながら、英語のような言語について言うならば、何かを述べたい時に一つしか表現が存在しないことはまれである。そのことが効果的な錯乱肢の作成を困難な

2) ここで述べている「信頼性」は、主に「評定者信頼性」であり、「テストの信頼性」と言う場合には、仮に同一の知識や能力を持っていれば常に同じ得点となる、という結果の安定性（一貫性）を指すことが多い。

ものになっているのであるが、逆に言えば複数の正答を良しとするならば、誰も選ばないような錯乱肢を作成する必要はなくなると考えられるのである。そこで、本研究では、この二つの設問形式を比較しながら、多肢選択問題において学習者の理解をより正確に測る設問形式についての検討を行っていく。

2. 先行研究の概観

2.1. 多肢選択問題に関する研究

多肢選択問題などの設問形式についての研究は、主として言語テストの分野で行われている。それらの研究には、前述の再認形式と再生形式の比較や錯乱肢の効果についての研究、空欄補充や並び替えなどの問題形式の比較などが含まれる。

再認形式と再生形式の比較を行っている研究を見ると、どの研究結果からも再生形式の方が難しい事が明らかになっている。Shohamy (1984) や中野 (1994) は読解問題における再認形式（多肢選択問題）と再生形式（記述式）を比較して、再生形式の方が難易度が高いことを報告している。また、Cheng (2004) はリスニングの内容理解問題において多肢選択問題、多肢選択クローズ問題、自由回答問題を比較して、多肢選択問題と多肢選択クローズ問題の間には差がないこと、および、それらと自由回答問題の間には有意差があることを報告している。

錯乱肢の分析に関する研究では、既に述べた Shizuka et al. (2006) 以外に、Morimoto (2008), Hoshino (2009) が研究結果を報告している。彼女らの調査は錯乱肢のタイプによる効果の違いであり、どのように効果的な錯乱肢を作れば良いのかについての教育的示唆を含んでいる。

設問形式の比較に関する研究には、島田 (2007), Ushiro et al. (2008), 熊沢 (2010) などが挙げられるが、これらの研究結果からも設問形式では多肢選択が他と比べて正解率が高いことが報告されている。池上 (2009) では、英文法

診断テスト作成のための検討課題の一つとして設問形式を取り上げ、通常の択一式、「正答なし」を含んだ択一式、複数正答式の3種類の形式を比較している。その結果として、通常の択一式問題を正解した参加者の中で、「正答なし」を含んだ択一式の問題に正解できた参加者の割合が80%以下であったこと、また「正答なし」が正答であった場合にはさらに低い60%強であったことを報告している。さらに複数正答式の全ての正答を正しく選択できた者は択一式の正解者のうちの40%程度であったことも明らかにしており、その結果から、複数正答式が最も難易度が高いことを示している。当然、単純に考えても正答の組み合わせが多くなればなるほど問題の難易度は高くなり、より正しい理解が必要となる。複数選択式の問題は選択肢一つ一つの正誤の判断をする必要があり、他の選択肢が正答を導くためのヒントになる割合も小さい。そのため、択一式よりも複数選択式の方が難易度が高い問題になることに疑問の余地はない。さて、池上（2009）では、複数選択式（正答式）の難易度については調査したが、択一式と複数選択式がどの程度学習者をその理解の程度に合わせて弁別しているのかを明らかにしたわけではなかった。そこで、池上（印刷中）では、択一式多肢選択問題と複数選択式多肢選択問題を比較し、択一式多肢選択問題の方が表1のマトリックスのBに入る受験者が少ないことを明らかにして、択一式よりも複数選択式の方が「理解していること」と「問題に正解すること」の一致度が高い可能性を示唆した。また、択一式は「間違いを探す」方法（消去法）を使うことが多く、複数選択式は「正答を探す」方法が取られやすい事も示している。本研究では、池上（印刷中）で示唆した点をさらに詳しく調べるため、択一式と複数選択式の文法問題の解き方のプロセスについてテスト・テイキング・ストラテジーの観点から詳細に検討している。

2.2. テスト・テイキング・ストラテジー

テストを受験し、各問題の正答を導きだす過程で用いられるストラテジーは、テスト・テイキング・ストラテジー（test-taking strategies）と呼ばれる。

Cohen (1998: 229-230) は、読解における多肢選択内容理解問題で用いられるテスト・テイキング・ストラテジーを大別し、Language use strategies に因るものと test-wiseness strategies に因るものに分類している (表2)。Cohen によると、Language use strategies に因るものは、テキストの先読みや読み返し、

表2 Cohen (1998: 230) のテスト・テイキング・ストラテジー

A. Test-taking strategies which rely primarily on language use strategies
<ol style="list-style-type: none"> 1. Read the passage first and make a mental note of where different kinds of information are located. 2. Return to the passage to look for or confirm an answer rather than relying solely on memory of what was in the text. 3. Read the questions first so that the reading of the text is directed at finding answers to those questions. 4. Read the questions a second time to make sure that their meaning is clear. 5. Try to produce your own answer to the question before you look at the options that are provided in the test. 6. Make an educated guess – e. g. use background knowledge or extra-textual knowledge in making the guess. 7. Be ready to change the responses to any given item as appropriate – e. g. in the case where new clues are discovered in, say, another item.
B. Test-taking strategies which rely primarily on test-wiseness strategies
<ol style="list-style-type: none"> 1. Look for the portion of the text that the question refers to and then look for clues to the answer there. 2. Look for answers to questions in chronological order in the text. 3. Read the questions first so that the reading of the text is directed at finding answers to those questions. (also a language use strategies) 4. Use the process of elimination – i. e. select a choice not because you are sure that it is the correct answer, but because the other choices don't seem reasonable, because they seem similar or overlapping, or because their meaning is not clear to you. 5. Look for an option that seems to deviate from the others, is special, is different, or conspicuous. 6. Select a choice that is longer/shorter than others. 7. Take advantage of clues appearing in other items in order to answer the item under consideration. 8. Take into consideration the position of the option among the choices (a, b, c, d). 9. Select the option because it appears to have a word or phrase from the passage in it – possibly a key word. 10. Select the option because it has a word or phrase that appears in the question. 11. Postpone dealing with an item or selecting a given option until late. 12. Estimate the time needed for completing the items and don't spend too much time on any given item.

背景知識の利用など、基本的に内容を理解することによって、答えを導こうとするストラテジーである。一方で、*test-wiseness strategies* は、テキストの探し読みや問題の先読みなども含まれるが、消去法を用いたり、選択肢の長さなどを手がかりにして、正答にたどり着こうとするストラテジーで、どちらかと言えば、良くない意味での「テスト・テクニク」的なものを指す。当然ながら、学習者が *test-wiseness strategies* を多用した場合には、表面的な結果を見ると、テストの点数などは良いかもしれないが、それによって読解力が正確に測られているとは言いがたい。Cohen の分類は読解問題に関するものであるが、読解問題に限らず多肢選択問題は *test-wiseness strategies* が多用されやすい形式の問題であり、既に指摘している通り、それが「理解していないけれども正解する」原因であると考えられる。表2を見ると、文法問題についても当てはまりそうなストラテジーが多く見られる。例えば、B-4 は文法問題でもよく見られる消去法を使うストラテジーであり、B-5 は他と少し違った選択肢を選ぶストラテジーである。伊佐地（2004）は Cohen（1998）をベースにして、さらに「総合問題」におけるテスト・テイキング・ストラテジーの分類を提案しており、その中には「読んだ響きが自然になるように解答する」や「自分の知っている語句を含む選択肢の中から正解として選ぶ」など、さらに多肢選択文法問題に当てはまりそうなストラテジーが提示されている。

実際に多肢選択問題におけるテスト・テイキング・ストラテジーについて実証的に調査を行っている研究には、Hoshino（2009）がある。Hoshino（2009）は、多肢選択語彙テストにおける消去法ストラテジーの使用について調査を行い、4タイプの消去法ストラテジー、すなわち1）他の選択肢との重複による消去法、2）背景知識に基づいた消去法、3）言語知識に基づいた消去法、4）なんとなくの消去法、が正答との関連性が異なる3タイプの錯乱肢（*paradigmatic* 関連、*syntagmatic* 関連、無関連）においてどの程度使われているかを明らかにすることを試みている。その結果、1）と2）はほとんど用いられないこと、3）と4）の消去法はどのような選択肢のタイプでも用いられ

ること、但し3)と4)の間には差があること、また消去法を使用した場合の正答率には違いがあることが報告されている。

テスト・テイキング・ストラテジーについては様々な研究が行われているが、その多くは読解問題を対象とした研究であり、文法問題のような内容把握型ではない問題についての研究はほとんどない。また、多肢選択問題の設問形式の違いに焦点を当てた研究は筆者の知る限り見られない。しかしながら、文法問題のように多肢選択形式がよく用いられる問題ほどその妥当性の検討は重要であり、かつ消去法などのいわゆる「テスト・テクニック」が使われやすい設問形式であるからこそ、そのテスト・テイキング・ストラテジーについて調べる必要があるのではないかと考えられる。そこで、本研究では、異なる設問形式の多肢選択文法問題に焦点を当てて、それぞれの問題を解く際に、どのようなテスト・テイキング・ストラテジーが見られるのかを発話プロトコルデータを分析することで明らかにすることを試みることにした。

3. 調査方法

3.1. 調査目的

本調査の目的は、択一式と複数選択式の2種類の設問形式の多肢選択文法問題において、学習者が最終的な解答選択に至るプロセスを明らかにすることである。また、その中でも特に、解答と思う選択肢を選ぶ際に用いられるテスト・テイキング・ストラテジーに焦点を当てる。

調査の目的は以下の2点である。

- (1) 学習者が、択一式多肢選択問題と複数選択式多肢選択問題を解くときに用いるテスト・テイキング・ストラテジーを比較し、その特徴を明らかにする。
- (2) 択一式多肢選択問題と複数選択式多肢選択問題それぞれにおいて、どのようにテスト・テイキング・ストラテジーを用いながら最終的な解

答選択に至るのかのプロセスを比較し、明らかにする。

3.2. 調査参加者および調査方法

調査参加者は、4年制大学非英語系学部 of 1, 2年生 15名であった。調査参加者は、調査者の担当する一般教養の英語クラスの中から希望者を募り集められた。

調査方法としては、まず択一式と複数選択式のそれぞれの設問形式による多肢選択文法問題を作成した。対象とした文法項目は「時制」で、その中でも特に「未来を表す表現」に関する問題に焦点を当てて作成した。問題文がわからないことを原因とした誤答が生じることのないように、問題文には日本語の訳を付けて出題し、出題箇所はそれぞれの述語動詞部分とした。問題数はそれぞれの設問形式で10問ずつであり、選択肢の数は4つとした。当然ながら、択一式には正答は1つだけ設定され、複数選択式には1つ以上の正答が用意された。

調査参加者には、2種類の多肢選択文法問題を解きながら、それぞれその時点で考えていることを声に出してもらい、それによって得た発話プロトコルデータを用いて、どのようなテスト・テイキング・ストラテジーを使いながら問題を解いているのかを分析することとした。

4. 調査結果と考察

4.1. テスト・テイキング・ストラテジー

まず、発話プロトコルデータによって得られた、学習者が用いていたテスト・テイキング・ストラテジーについて報告する。分析するに当たっては、Cohen (1998) の指摘する2つの strategies (表2参照) を本研究の多肢選択文法問題に当てはめて、それぞれ Language use strategies を「知識に基づいたテスト・テイキング・ストラテジー」、test-wiseness strategies を「知識に基づか

ないテスト・テイキング・ストラテジー」とした。表3は、観察によって得られた結果である。

「知識に基づいたテスト・テイキング・ストラテジー」として用いられたストラテジーは6タイプあった。まず、問題文の日本語訳を基に選択肢を選ぶストラテジー（A1）は、それぞれ正答を選ぶ場合にも、誤答を選ぶ場合（選択肢を誤答として消去する場合）にも用いられていた。また、問題文の日本語訳の時制を基に選択肢を選ぶストラテジー（A2）も同様に正答を選ぶ際にも誤答を選ぶ際にも用いられていた。このA2のストラテジーは、日本語訳の意味を考えた上で用いられる場合も意味を考えないで用いられる場合もあり、また実際には間違っている場合も見られた。しかしながら、時制を問う問題において、時制を基に解答する行為そのものはたとえ間違いだとしても文法知識に基づいたストラテジーだと考えられるため、「知識に基づいたテスト・テイキン

表3 観察されたテスト・テイキング・ストラテジー

A 知識に基づいたテスト・テイキング・ストラテジー	
A1	問題文の日本語訳に合う選択肢を正答／誤答とする
A2	問題文の日本語訳の時制に合う選択肢を正答／誤答とする
A3	問題文の日本語訳を色々言い換えて、それに当てはまりそうな選択肢を正答とする
A4	問題文の日本語訳の中にヒントとなる表現を探し、それによって選択肢を選ぶ
A5	選択肢の日本語訳を考え、それと問題文の日本語訳を比べて選択肢を選ぶ
A6	文法的に誤りのある選択肢を誤答とする
B 知識に基づかないテスト・テイキング・ストラテジー	
B1-1	知っている（聞いたことがある）表現が含まれる選択肢を正答とする
B1-2	知らない（聞いたことがない）表現の選択肢を正答／誤答とする
B2-1	正解として思い描いたものと似ている表現の選択肢を正答とする
B2-2	誤答と判断したものに似ている表現の選択肢を誤答とする
B3	判断がつかない表現の選択肢を正答／誤答とする
B4	根拠なく正答／誤答とする
B5	語句が多い、一語が長い等、他の選択肢とは異なっている選択肢を正答とする
B6	問題文の空欄に入れて読んでみて、自然だと感じられる選択肢を正答とする
B7	他の問題の選択肢を利用する
B8	出題者の意図を推測する
B9	これまでに選んでいないタイプの選択肢を正答とする

グ・ストラテジー」に含めている。一方で、上記のストラテジーに比べれば数は多くなかったが、問題文の日本語訳を色々と言い換えて、選択肢と比べるA3のようなストラテジーも見られた。具体例を挙げると、以下のa)、b)の様に、語尾を変化させて、当てはまりそうな選択肢を探すという方法である。またc)のように、問題文の日本語訳の一部に目を付けて、それによって選択肢を選ぶA4のようなストラテジーもみられた。

- a) 「『車の鍵を取ってくるよ』は『(取ってくる) つもりだ』と言い換えてもおかしくないと思うので… (特定の選択肢を選ぶ)」
- b) 「これは(『僕が開ける』を)『僕が開けるつもりです』っていう表現に変えて、3番も正解にできるんじゃないかなと思います。」
- c) 「『通常の時刻表で』っていう(言葉がある)ので、毎回繰り返される習慣ってイメージなので現在形(の選択肢が正答です)。」

またA1, 2, 3とは逆に5のように、選択肢の日本語訳を考え、あるいは場合によっては言い換えたりしながら、それを基にして、問題文の日本語訳と比べるストラテジーも見られた。そのほか、6のように、日本語訳にかかわらず、文法の正確性の観点から選択肢の語句が問題文の空欄には入らないと見なして誤答とするストラテジーも多く見られた。

「知識に基づかないテスト・テイキング・ストラテジー」には派生しているものも含めて11タイプのストラテジーが見られた。まず、正しいかどうかの判断ができなくても、知っている表現が含まれていれば正答とする様なストラテジーや逆に知らない表現の場合は誤答とみなすストラテジーが多く見られた(B1-1, B1-2)。調査参加者の中には、知らない表現をむしろ正答とみなす者もいたが、このような調査参加者はどちらかと言えば英語に苦手意識を持っている学習者であった。次に選択肢を見る前に正解を思い描いており、選択肢内に

同じ語句がない場合に、それに似ている選択肢を選ぶという戦略も見られた (B2-1)。このような学習者は、自分の思い浮かんだ選択肢がある点では知識を伴っているのであるが、その後、それがなかった場合には、それに似ていることを頼りにする点で「知識に基づかない」と判断した。これと同様に、すでに誤答と考えている選択肢と似ているものは自動的に誤答とする方略も観察された (B2-2)。B3に見られるのは、わからない表現があった場合の対処であり、分からない表現があった場合に正答とする学習者と誤答とする学習者が見られた。正答とする学習者の多くは、「誤りを見つけれない」ために正答とみなす場合が多く、誤答とする学習者の場合は正答かどうかの判断ができないために誤答とみなしていた。B4はいわゆる「勘」に頼った状態であり、調査参加者が「なんとなく」と根拠を明確にできなかったものをこの中に分類した。数は多くはなかったが、「勘」とは別に、B5のように「他の選択肢よりも長い」などを理由として選択肢を選ぶ学習者もあり、これは Cohen (1998) にも見られた戦略である。また意味とは無関係に問題文の空欄に選択肢を入れて読んでみて、なんとなく自然に感じられるものを選ぶという伊佐地 (2004) が提案しているような戦略 (B6) も見られた。B7の「他の問題の選択肢を利用する」というのは、自分の中で一貫性を持たせるために、

- d) 「これは2番と4番にします。いちいち未来が近いか遠いかって考えてたんですけど、(中略)、レベルを考えると、採点者はどう考えて丸するのはわからないんですけど、どっちでも丸にして OK だと思ってくれるんじゃないかと思って」
- e) 「こういう問題がさっきもどっかで出たんですけど、多分(さっき迷った方の)どっちかだって信じているんで、表現が一緒だったんで、どっちかであつたら(点数が)稼げるかなって思って(さっきの問題とは逆の選択肢にします)」
- f) 「will とか be going to がいっぱい出たから、(今回は) こっちで(それとは違う選択肢を選ぶ)」

自分がこれまでに選んだ選択肢をヒントにして選択肢を選ぶようなストラテジーである。また、d) のように出題者（採点者）の意図を読もうとしたストラテジー（B8）も見られたが、これはレベル的なものや選択肢の並び方などから、採点基準などを想像して迷った際になんとなく丸がもらえそうな選択肢を探すというストラテジーである。多肢選択問題などではあまり見られないようにも感じられるが、いわゆる中学校、高等学校の中間テストや期末テストで採点者を思い浮かべながら答えるようなものなのではないかと考えられる。e) や f) に見られる B9 のストラテジーは、B8 のように、ある意味、出題者の意図を推測しているが、同じような答えを出題者が出し続けることはないだろうとの予測によって、これまでとは違うタイプの選択肢を選ぶようなストラテジーであった。

以上のように様々なストラテジーが見られたが、択一式のみに見られるストラテジー、あるいは複数選択式のみに見られるストラテジーはなく、学習者によって使うストラテジーは異なっているが、基本的にはどのストラテジーもどちらにも用いられていた。すなわち、択一式あるいは複数選択式に独特なストラテジーというよりも、多肢選択問題に使われるストラテジーと考えて良いのではないかと考えられた。しかしながら、池上（印刷中）において報告するように、択一式と複数選択式では、「誤りを探すのか」「正答を探すのか」という違いがあり、それはテスト・テイキング・ストラテジーにおいても同様の傾向が見られた。すなわち、これらのストラテジーを「誤答を探すため」に使うのか、「正答を探すため」に使うのかの差である。択一式を解答した際にほとんど参加者は誤答を探す「消去法」を使い、選択肢を消去するために2種類のストラテジーを用いていたが、複数選択式を解く際には、それぞれの選択肢の正誤を判断するために、つまり正答かどうかを判断するために、これらのストラテジーを用いていたのである。

4.2. 解答プロセス

すでに述べてきたように、択一式の場合、程度の差はあれ、調査参加者全員が消去法を用いていた。特に、解答に迷った際に選択の幅を狭めるために消去法を用いている場合が多く、最終的に選択肢を2つ程度にまで絞ってから、別のストラテジーを用いて解答するようなパターンが多く見られた。一方で、複数選択式は、一つの選択肢を誤答と判断しても、それが結果的に正答を選ぶための選択の幅を狭めることにつながらないため、誤りを探すところまでは消去

〈択一式〉 ※TTS=テスト・テイキング・ストラテジー

- (1) 問題文を読む（日本語訳を読む）
- (2) （正答を予想する）
- (3) 選択肢を読む
(⇒ 予想した正答がある。⇒ 終了)
- (4) 選択肢を検討する
 - (4-1) 「知識に基づいた TTS」で正誤を判断

⇒	{	正答があった場合	⇒	<u>終了</u>
		誤答があった場合	⇒	次の選択肢の検討
		わからない場合	⇒	「知識に基づかない TTS」で正誤を判断

⇒ {

正答があった場合	⇒	<u>終了</u>
誤答があった場合	⇒	次の選択肢の検討
- (5) 選択肢が残り一つになった場合は自動的に終了

〈複数選択式〉

- (1) 問題文を読む（日本語訳を読む）
- (2) （正答を予想する）
- (3) 選択肢を読む
(⇒ 予想した正答がある。⇒ それ以外の選択肢を検討する)
- (4) 選択肢を検討する
 - (4-1) 「知識に基づいた TTS」で正誤を判断
 - (4-2) できない場合は「知識に基づかない TTS」で正誤を判断
- (5) (4)を選択肢の数だけ繰り返す ⇒ 終了

法と同じであっても、結局はすべての選択肢の正誤を一つ一つ検証していく必要があった。これらの結果と今回のテスト・テイキング・ストラテジーの用い方を基に、択一式、複数選択肢の解答プロセスを考察すると上記のようになると考えられる。

(1)から(3)までは共通である。しかし、(4)選択肢の検討からが大きく異なる。まずそれぞれの目的が大きく異なっている。択一式は主に誤答を探す事を目的としたストラテジー使用が多く、複数選択式は正誤を判断することを目的としてストラテジーを使用する。また、択一式の場合は、そもそも予想した正答があった場合は選択肢の検討をする必要はない。しかし、予想した正答がない場合、あるいは予想しなかった場合は選択肢を検討することになるが、択一式は「選択肢の検討」の終了条件が多いことが分かる。つまり、このことは、どの選択肢が検討されたのかは最終的に選ばれた解答を見てもわからないことを意味する。同時に最後まで消去法がなされた場合は、検討されていない選択肢が残った結果、正答として選ばれている可能性もある。それに対して、複数選択式は基本的に全ての選択肢の検討が終わらなければ終了できない（もちろん、択一式も複数選択式も、検討の途中で「検討を止める」という選択肢は存在する）。そのため、最終的な解答は、全ての選択肢が、どのストラテジーを用いたかは不明であるが、検討された結果であると考えることができる。すなわち、この解答プロセスの比較からも複数選択式の方が択一式よりも学習者の理解の度合いをより正確に測れている可能性が示唆されている。

5. お わ り に

本研究の結果から、択一式と複数選択式では、用いられるテスト・テイキング・ストラテジーにはそれほど大きな差がないことが示された。また、択一式が選択肢を減らすため、つまり誤答を探すためにテスト・テイキング・ストラテジーを用いることが多いのに対して、複数選択式は選択肢の正誤を判定する

ためにテスト・テイキング・ストラテジーを用いていることも確認された。さらに択一式はどの選択肢が検討されていてどの選択肢が検討されていないのかが不明であったが、複数選択式は一応全ての選択肢が検討されていることも明らかにされた。そのため、複数選択式が択一式よりも、より正確に理解を測っている可能性が高いことが示されたと言えるだろう。

今後の課題としては、本研究で得られた解答プロセスの仮説を検証していく必要がある。また全ての選択肢を検討しているという点は正答による理解度の測定だけでなく、誤答による理解の測定にも活かせる。そのため、誤答分析についても検討していく必要がある。また、複数選択式多肢選択問題を用いた学習の効果についての調査も不可欠であると考えている。

本研究は科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究：課題番号 25580144）の助成を受けて行われた。それを記して謝意を表す。

参 考 文 献

- Brown, J. D. (1996). *Testing in Language Programs*. Upper Saddle River, N. J.: Prentice Hall Regents.
- Cheng, H. (2004). A comparison of Multiple-Choice and Open-Ended Response Formats for the Assessment of Listening Proficiency in English. *Foreign Language Annuals*, 37(4), 544-553.
- Cohen, D. (eds). (1998). *Strategies in Learning and Using a Second Language*. London and New York: Longman
- Hoshino, Y. (2009). Effects of Distractor Characteristics on the Use of Elimination Strategies by Japanese EFL Learners in Vocabulary Tests. *ARELE*, 20, 151-160.
- Hoshino, Y. (2013). Relationship between types of distractor and difficulty of multiple-choice vocabulary tests in sentential context. *Language Testing in Asia*, 3: 16. Retrieved June 20, 2015, from Internet Site : <http://www.language-testing-asia.com/content/3/1/16>
- Hughes, A. (2003). *Testing for Language Teachers*. Cambridge UK: Cambridge University Press.
- 池上真人 (2009) 「英文法診断テスト作成の試み－設問形式と採点・診断方法の検討」『言語文化研究』28(2), 121-143.
- 池上真人 (印刷中) 「択一式と複数選択式の多肢選択文法問題の比較研究」『四国英語教育学

会紀要』35.

伊佐地恒久 (2004) 「英語リーディング熟達度ラストにおける『総合問題』の妥当性の検証」
STEP BULLETIN, 16, 15-29.

熊澤孝昭 (2010) 「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」
JALT Journal, 32 (2), 169-188.

Morimoto Y. (2008). Attractive Distractors in Sentential Gap-Filling Tests: With a Focus on Proficiency Levels. *ARELE*, 19, 211-220.

中野幸子 (1994) 「高校生の読みにおける要約問題と多肢選択問題との相関」*STEP BULLETIN*, 6, 30-33.

島田めぐみ (2007) 「日本語聴解テストにおける選択肢提示形式の影響」『日本語教育』109号, 21-30.

Shizuka, T., Takeuchi, O., Yashima, T. and Yoshizawa, K. (2006). A comparison of three- and four-option English tests for university entrance selection purposes in Japan. *Language Testing*, 23 (1), 35-57.

Shohamy, E. (1984). Does the testing method make a difference? The case of reading comprehension. *Language Testing*, 1, 147-170.

高木修一 (2011) 「多肢選択式問題は公平か－記憶保持の強さから－」*STEP BULLETIN*, 23, 13-29.

Ushiro, Y., Nakagawa, C., Morimoto, Y., Hijikata, Y., Watanabe, F., and Kai, A. (2008). Effects of question types on item difficulty in two reading test formats: Open-ended and multiple-choice. *ARELE*, 19, 201-210.